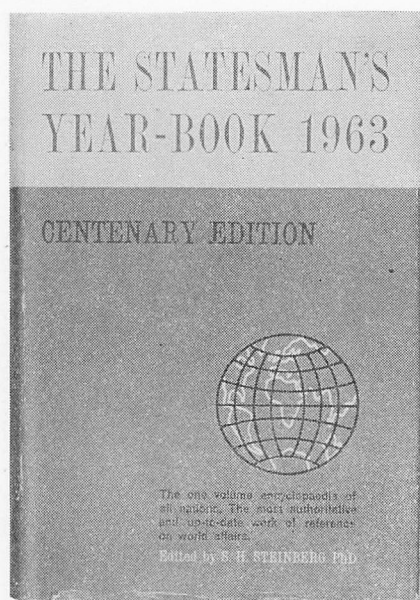


第四章 政治年鑑

一 政治年鑑

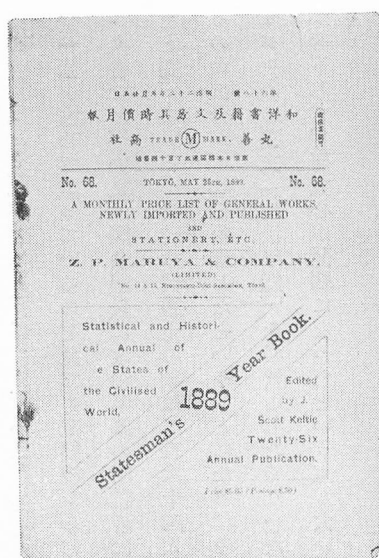
日清戦争大勝の翌明治二十九年（一八九六）から、明治三十三年（一九〇〇）までは、十九世紀の終末として特徴づけて観ずるのが便利であり、世の中の大いに動揺変移の傾向をあらわした。これが政治的にあらわれたものが明治三十一年六月に成立した憲政党内閣で、首相は大隈重信、副首相の格で内相となったのは板垣退助である。明治十八年に内閣制度ができてこの方、その更迭すること十一回。首相は伊藤博文（長）四回、黒田清隆（薩）一回、山県有朋（長）、松方正義（薩）二回で、みな薩長藩閥の組閣であり、挙げもちいる大臣も両藩の出身者でなければ、それに阿附随属してきた者で他藩といっても準薩長藩閥に外ならない。しかるに明治十年代前半の自由民権運動以来、自由党（総理板垣退助）と改進黨（総理大隈重信、のち進歩党）の反目によって、薩長藩閥政府は辛うじて、鷸蚌いじばうの争いにおける漁夫の地位を占め、つねに自由党を懐柔して、議會を切りぬけて来たものが、地租増上案をめぐって、ゆくりなくも自由、進歩両党、多年の旧怨を解いて合同して政府に迫り、事情はさらに進展して大猿の両党が合同して憲政党を組織したので、時の総理大臣伊藤博文は挂冠し、藩閥の同輩山県有朋、井上馨その他がこぞって反対するのを推しきって、敢えて憲政党の両首領の大隈、板垣を推薦する態度に出た。公明なる出所進退



「政治年鑑」百年記念版

というべきで、内心は両党合同の日浅く、党情の固定せざるに乘じ、この重荷を投げかけてその失敗をかけたものと穿った觀察をする批評家、史家もあるが、裏面をさぐれば何事にも暗い影はつきまとう。ともかくもこれは薩長藩閥独占の政治体制がくずれ、たとえ形が完備を欠いたとしても、政党内閣に向っての進一歩と見ねばなるまい。

しかしこの内閣は、やっぱり合せ物ははなれ物で、自由進歩両党の内争と勢力あらそいに明け暮れした形で、ついに半年の短命をもって崩壊した。政治史家は何等なところなかったとして冷嘲的筆鋒を弄するのが習い、この内閣出現の意義を大してみとめないのが普通だが、それは薩長の宣伝に乗せられたので事態を正しく評価したものではない。薩長は大隈の成功を阻止するに全力をあげ、地しぱりという笹の根のように、縦横に張りめぐらした各省の官僚網を総動員して、これが倒潰をはかったのだ。その事情は、終戦後出現した社会党内閣が、不動金しぱりの官僚網を前にして、何の改革実績もあげられなかったのと酷似し、むしろあれ以上であった。この憲政党内閣は、尾崎行雄文相の「共和演説」が、倒潰の直接原因になっているのをみても、たしかに民主的方向への一歩接近を示している。



明治22年5月「和洋書籍及文房具時価月報」

ところで、本書には関係のない政変について、何故この言及をなすかと云うと、首相大隈は博弁宏辞のほかに無類絶倫の記憶力を有し、字内の形勢、列国の強弱消長を語るに、一々正確に数字を上げて、掌上の物をさすが如くであるとの評判であった。世はその強靱無比の記憶力におどろくと共に、兵備でも、産業でも、その国に行った如く語る知識の、どこから得来たったかに驚き、いく程もなくそれは The Statesman's Year-Book と題された政治年鑑が刊行せられてしていると聞いて、世は便利な書物のあるものと納得した。あるいたずら者が、この書を手として、その記事をおぼえこんで大隈を訪ね、談のいづる毎にこちらから機先を制して、その状態はこう、数字はこうと語ると、大隈が

「さては君も、あれを読んできたな」

と云って苦笑したという話がつたわっている。この「政治年鑑」を丸善が取扱いだしたのはいつの頃からの事かわからぬが、その広告はすでに明治二十二年「和洋書籍及文房具時価月報」第六十八号の表紙にあるが、「学の燈」では明治三十年五月号の赤紙一頁に We expect shortly (近着) The Statesman's Year-Book for 1898, price, Yen 5.75 postage .18 とあるのが最初で、翌七月号には Just Received The Statesman's Year-Book

Statistical and Historical Annual of the States of the World for the Year 1898 という広告が、裏表紙に全一面を占めて載っているのを見ても重要視せられていることがわかる。

丸善では、いまは国会議員に政治年鑑の購読者は少ないが、明治時代は年平均三十数冊ずつを議会におさめていたと語っている。当時の代議士の数は二百六十四人、その一割が英語がよめたという記録があるから、してみると、その大部分がこれを珍重したということになる。今は日本でも各種の年鑑が出版され、それで事が足りるので、オリジナルの英文「政治年鑑」を必要としなくなったということも大いにあろうが、ひとつは代議士の外国書読破力が低下して、研究心が薄弱になったという点も大いにある。

二 「政治年鑑」一〇〇年史

世界の政治家から重宝される「政治年鑑」はマクミランの発行である。この英米を通じて第一の出版社は、丸善を古くから取引きのある海外第一の得意先きといい、関東大震災の時と、今度の戦災と二度に及んで、潰滅した丸善の立上りに援助の手をかし、現会長のハロルド・マクミランは元のイギリスの総理大臣で、しかも保守党にあってはデイスレリ、チャーチルについて進歩的な三大政治家といわれている人だが、昭和四十四年、ほとんど丸善を見るのが目的で、オーストラリア旅行の帰途、微行で日本に立ちよったほどである。そういう関係にあるのである。ここには、ここにその特異の出版なる「政治年鑑」の歴史について一言することがムダであるまい。実は一九六三年が「政治年鑑」発行の百年にあたり、Centenary Edition が出て、その巻頭に百年史の要がのっている。

その編者は百年の間に四度かわった。Frederick Martin (1864—83), Sir John Scott Kelbie (1883—1926), Mortimer Epstein (1926—46) そして現編者は名前を明かにしてない。

これを企画し、今日まで継承しているその性格を決定したのは、もちろんマーチンである。

しかしそのアイデヤは総理大臣のロバート・ピールから出た。「文明世界の各国の政治的、社会的実状を緊縮して一巻にまとめた手引書を出してみてはどうか」と、マクミラン社長アレキサンダーに云ったのである。そこでその編集の適任者を物色していると、文豪のカーライルとそこそこ大蔵大臣であったグラッドストーンとの紹介状をもって、マーチンがマクミラン社をたずねてきた。彼はベルリンうまれのドイツ人だが、イギリスにきて、カーライルに雇われて「フレデリック大王伝」の著作を手伝った経験がある。「それは、Statesman's Year-Book という事にしたらよろしい」といって、出版は「まず官公文書にあたること。それが不完全あるいは欠乏の場合はじめて、権威のある著書、有力新聞雑誌その他信頼のできる報告によること」というのを方針としたが、一八七〇年（明治三年）から、官公文書というのを更に一步すすめて、この官公文書の作製者、統計局、政府各局、外交機関、学者団体、個人の研究家と直接の交渉をして、記事を一そう生彩あるものにした。今では各種の編集関係者、教授、図書館員、ジャーナリスト、放送関係者などが自発的に援助を申出て徐々に変改を加えつつ（その詳しいことは省略する）、現在の形になった。

第一冊の出た一八六四年は日本の元治元年である。その時、この書として盛る「文明世界の諸国」をどう考え、また区分したかと云うと、第一部は「ヨーロッパ諸国」と題してオーストリアからトルコまでの国をABC順にな

らべてある。第二部は「アジア、アメリカ、オーストラリアの主要諸国」であるが、日本はまだ「文明国」あるいは「主要諸国」とみとめられず、その記事がないのである。

記述は各国について、次の項目にわけた(1) 統治者とその家族(2) 憲法と政治(3) 教会と教育(4) 歳入と歳出(5) 陸海軍(6) 人口(7) 貿易と通商

十年後の一八七四年(明治七年)版からアジアの部にセイロン、支那、香港、印度、日本、ジャワ、ペルシャ、シャム、アフリカでアルゼリヤ、ケープ、エジプト、リベリヤ、モロッコ、ナタールなどの記述が加わった。してみると日本は、維新前後十年にわたって、いわばこの準世界公式記録ともいふべき書に登録せられていなかったわけになるが、それがなぜこの年になって急に東洋諸国とともに拾われて記載せられたか。それはイギリス帝国主義の植民地重視、東洋への食指とはなして考えることが出来ず、日本の場合は、この年四月に断行した台湾征伐がいちじるしく外交事情をかえたが、それは翌明治八年版に記載せられているとして、その前ぶれの岩倉具視一行の米欧巡廻、征韓論の破裂などが、いちじるしくその存在をイギリスに認識せしめた事があったかどうか。怪しげでもどうかか独立国の体面をもちたえていた朝鮮の記述がどうして無いのか。一「政治年鑑」の記述にも、大きな国際歴史の流れの変遷がうかがわれるのに、こういう研究はいまだなされていない。

元より政治経済を主とする記述であり、政党の消長にも触れるから、国内からも国外からも干渉がおこり、ことにヒトラーとスターリンからは、手をかえ品をかえて、威嚇、懐柔と硬軟さまざまの圧迫、誘惑があった。日本の軍部内閣なども、かかる出版物の存在と意識と権威とを知るほどの明があったら、何等かの口出しをせずにはおか

なかったであろう。しかし一切の干渉の上に超然として、公平を堅持したのは、この年鑑の特色であり、誇りである。

スコット・ケルティが編集にあたった時は、イギリス帝国主義の繁栄がその極に達した時代だったので、彼はレイアウトを改め、今までの第一部「ヨーロッパ諸国」を「イギリス帝国」とし、第二部を「国家とまとめられる諸外国」とした。倨傲尊大もここに到ってきわまるが、イギリスの植民地は世界の三分の一を占めると云われた時代だから、これでも何とか格好がついたのである。

しかしさきほどの終戦後からは大きくかわり、ことに一九四七年版からは、「The British Commonwealth and Empire」が第一部を占めたのに代って、International Organization がこの場を占めているのも時勢であろう。

「政治年鑑百年史」はこういう文章を結論としている。

「世界各方面にわたる凡ゆる国々について博搜調査するのがこの政治年鑑の主目的で、遅々たる発達をして今日の成果をおさめた。一八六〇年代の態度は小イングランドであり、一八九〇年にはイギリス帝国主義に拡大し、一九二〇年には広大なる国際連盟機構の中においてイギリス家族国民という概念がうまれ、遂には国際連合の平等的結論におちつくに至ったのである。イギリスにおけるそうした論調の変化を理解するに、魅力ある貢献をした。」

してみれば明治七年に、初めて日本の記述があらわれて以来、自由民権運動の発生、憲法発布、日清戦争、日露戦争、第一次大戦、満州事変、軍部独裁政治などが、この云わば世界の準公式記録に何と反映し、記述せられてい

るか。興味ある問題だとは思うが、いまだ研究した人がない。第一、そんな古いのからの政治年鑑がどこかに、そろっているかどうか疑問である。

三 ゾラとヴィゼッテリイ版

「学の燈」の巻末にのせる洋書目録は、書数もふえて諸部門に整備され、このふみに、Political Economy, Philosophy, History の部などを点検してみても、これはと思う名著が大体その中に見出だされるようになった。英語が大半を占めるが Deutschen Büchern, Bibliothèque Nationale (フランスの書物で、こういう叢書の名称である) が独立の項目となっているのも一進歩である。小説も独立しているが、「学の燈」明治三十一年の十二月号をみると、エミール・ゾラの小説の英訳を一括して次のようにまとめている。

E. Zola-Abbé Mourets Transgression. The Conquest of Plassans. The Joys of Life. Money. The Rush for the Spoil. Therese Raquin. The Ladies Paradise. A Love Episode. Pot-Bouille. La Bête Humaine. The Fortune of the Rougons. Nana's Daughter. Nana's Brother. [Laird Lee] 各冊 50 Sen.

シェークスピアや、カーライルや、テニソンはほぼ全著作がまとめて載っていることが一、二回あるが、この時ゾラをこのように纏めて輸入したこと、他の作家においては例がなく、何となく疾風怒濤の到来を暗示するものがある。

数年をおいて日露戦争をさしはさんで自然主義運動が小説壇におこり、倫理学界、哲学界から広く一般文化に波

及した。その颱風の目となったのはゾラと云ってよく、単に芸術的完成から見たら、彼の作はフラウベル、モウパッサン、ゴンクールなどの洗練に及ばぬこと遠いであろう。しかしクラウド・ベルナルの「実験医学研究序説」を模して「実験小説論」を唱えて、文学を科学に通じ、更に「木の芽立ち」や「労働」によって文学を社会問題と連絡させる大規模な作家は、ゾラを措いて他になく、而もその小説に至っても、彼の主張が実現されて写真に偏したところは面白くないが、彼の主張を裏切っていたる所にもち前の素質があらわれてきているので面白い。彼の本質は偉大なるロマンサーたる点にあるとラフカディオ・ヘルンは帝国大学の英文科学生に講義している。

元よりそのゾラの名の伝わったのは、明治十年代末期からで、西園寺公望は明治四年フランスに留学して明治十四年に帰朝するまでに、続々と刊行されつつあったゾラを読破した。ちょうどルーゴン・マッカル叢書の半ばまで消化したことになる。中江兆民訳の「維氏美学」がその名をつたえ、外山正一は逸早く最初の英訳を手に入れて読んだ。明治二十一年には、保安条例でロンドンに追われた尾崎罌堂が「朝野新聞」(十月六日)に「米欧漫遊記」をのせ、その中に「仏国の小説」の項目があつて、左の記述をみる。

「ゾラ氏はこの程学士会員に選挙せられたるほどの名士なるが……その著書には卑猥なる者多く、倫敦にて之を出版したる書肆は淫猥俗を乱るの廉を以て、数日前に法廷に召喚せられたり……その著ナナ、ラ・テルの如きは久しく英国に行はれ、その発売高はすでに数十万部に及べるべきに、今日に至て出版者の法廷に召喚せられたるは何故にや」

この出版者とは Vizettery のこと、彼こそイギリスに清新な大陸の近代文学の翻譯を提供した最初の人で、

これを総称して Vizettery Edition の名が高く、のちに内田不知庵が訳した「罪と罰」なども、このヴィゼッテリー版だったのである。この訴訟の結果、ヴィゼッテリーは破産したが、その訳書は他の出版者が継承し、元版も新版も共に、日本にたくさん舶載せられた。馬場孤蝶は内田魯庵などに雁行する読書家として聞えた人だが、青年時代の思出として興味あることを語っている。

明治二十四年の八月に相州酒匂の松濤園にいて「ナナ」をよんでいると、滞留客のひとりが

「ゾラをお読みですか」

と話しかけてきた。

「ええ、面白いと聞きましたもんですから、友だち四人ほどで云いあわせてナナを四冊取って読むことにしたんですが、私は今それを始めたばかりのところですよ」

「それは惜しいことでしたな。同じものをお買いなさらずとも、皆さんがちがったものを一冊ずつお取りなすって、交換してお読みなすたら、よかったでしょうに」

と教えてくれた。この人は尾崎紅葉で、それから、自分のよんだゾラの諸作の梗概から、坪内逍遙にきいたのはこうだったといって、いろいろ筋立を話してくれた。紅葉はその翌々年にはゾラから巧みに換骨脱胎した「隣の女」をかいていた位だから、ゾラはかなり読んでいたらしいが、孤蝶に教えたように注文（彼は丸善のお得意であったから、むろん、そこに）して取りよせたのだ。これがこの「学の燈」にまとまった広告の出る前のゾラの読者で、紅葉のほかに坪内逍遙がよんでおり、最初の翻訳は十八公子（松居松葉）が「国民新聞」にのせた「大洪水」（明

治二十五年八月）であろう。

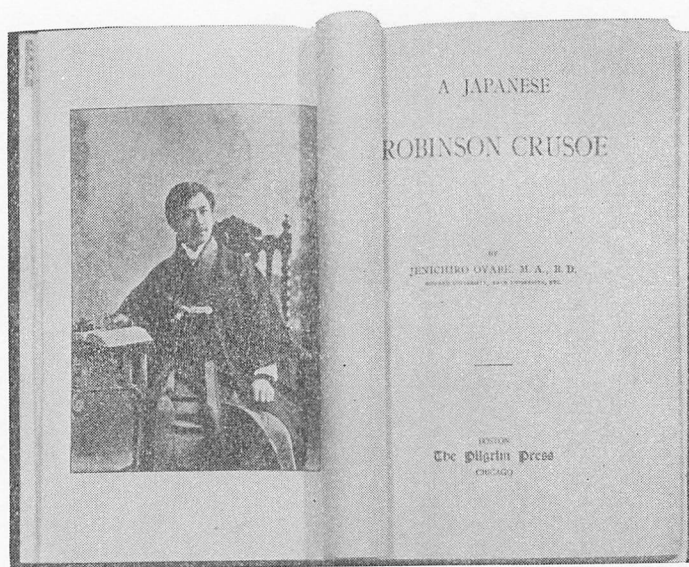
しかしゾラ移入の正史をなす永井荷風の「ナナ」の梗概訳や「地獄の女」への影響、小杉天外が「初姿」その他をかねて写真主義の主張をしたのなどは、この丸善の広告があらわれて以後の読者にちがいない。

四 渡米径路の二系統

「学の燈」第二巻の広告中から、いま一つ取出して掲げたいのは A Japanese Robinson Crusoe である。著者は Jenichiro Oyabe（小矢部善一郎？）とある。じつはこの年、ボストンとシカゴにあるブリグリム・プレスから出版されたのだが、恐らく丸善が日本における出版権をとったので Now Ready として全一頁の広告をしている。

彼は慶応三年に秋田にうまれた。曾祖父は最上のプリンスとあるから、大名ではないにしてもその一族にはあたる位な家がらであろう。祖父は有名な剣客であったが秋田の豪商の養子になった。父は政治法律の知識をもつ教養高き人物であった。

しかし彼は十七才のとき封建的な父の訓練のきびしさに反抗して、家をとび出した。初めはアイヌの向上を夢想して北海道にわたり、更に太平洋の向うにアメリカを望んで、渡航の念禁じ難く、ついに千島からシベリヤにわたって、そこからその伝手を得ようとしたが、大雪の中で半死半生の苦労を経験して、一たん日本にかえされ、今度は支那大陸にわたって、アメリカ船にたのんで待望のアメリカについた。しかし僅かばかりのもち金がまさに尽き



J. Oyabe-A Japanese Robinson Crusoe

ようとして下宿代にも窮した時、重病にとりつかれて施療病院に収容され、二人の看護婦つきそいで善美をきわめた介抱をうけ、あやうく一命を拾うて退院した。そこからアルバイトの口が見つかって病院の雑役にはたらし、忠実につとめた証明書が与えられて、次ぎから次ぎへと働き口が見つかり、学校に入ってハムプトン学院、ハーワード大学を通して、最後はエール大学を卒業する話である。

明治の中期は渡米熱の最も盛んな時代で、野望に燃ゆる多くの青年が太平洋の波濤の東を望んだ。彼等が渡航方法を考えるにあたり、アメリカ生活を経験した先輩には二つの系統があった。ひとつは漂流民で、その最も有名なのはジョン万次郎とジョゼフ彦であり、ことに彦は、十三の時江戸がよい乗船が難破して、アメリカ船にすくわれ、海外生活九年の間で、アメリカで学校に入つて教育をうけ、日本人として最初のサラリー・マンとなり、

日本人として最初の帰化米人となり、開国とともに帰ってきて、横浜のアメリカ領事館に通訳をつとめた。すなわち日本人として最初のアメリカ役人である。桜田事変の攘夷熱の高まりから身の危険を感じて、再渡米したところ、ちょうど黒人奴隷解放の南北内乱の最中で、皮膚の色が変わっているのに、あまりに英語を巧みに話すところから、南軍のスパイとまちがえられ、捕えられ日本人として最初のアメリカ軍事裁判にかけられ、嫌疑が晴れて釈放されて、リンカーン大統領に会う好運にめぐまれている。「人民のため、人民による、人民の政治」の言葉で、デモクラシーの基礎を定めたといわれる不世出の大統領に引見せられて、温かい握手をうけた唯一の日本人がジョゼフ彦である。

彼はその波瀾の多い一生を綴った *The Narrative of a Japanese* という上下二巻の著作を刊行した。ドイツ語訳もできている名著だが、日清戦争前後、丸善が取りついで販売しており、終戦後サンフランシスコの日米出版協会で複製版をつくったのも、又丸善が大量の依託をうけた。

この漂流民にたいして、今ひとつの系統は、みずから非法渡航をくわだてた *volunteer* で、当時もっぱら密航者、女性には密航婦と呼ばれた。先頭をきるのは吉田松陰で、失敗して後に斬首の刑にあったが、それにつづく新島襄は成功して、アメリカで教養をつみ、岩倉大使の米欧巡廻の際、通訳たることを頼まれても、上役に土下座をする礼儀は、あまりに奴隷的でいさぎよしとせざるところと云って、拒絶した。果然、アメリカの教育は新島を日本人として最初の自由思想家にしたのである。

日本が開国したので、万次郎や彦のような漂流民は永久に跡を絶った。しかし吉田松陰、新島襄の跡をつぐ密航

夢想者は、明治になっても絶えず、これは最後の記録として意義がある。日露戦争のころ、この「日本ロビンソン・クルーソー」を読んで、アメリカ渡航をくわだて、横浜と神戸でその手づるを求める者がよくあったが、そのころになると、船でも考え、一々の荷を鉄棒で衝いてまわるので、中にかくれているとつぶし殺されると語っていた青年もあった。

終りにこのころの店の実務的なことを知るため、中村重久日記から抄出すると――

明治三十一年三月二日 夜来松下、小柳津、鈴木、金沢、山崎、三次ト財政調査会ヲ開キ目下資金欠乏ハ書店

品物ノ増加シタルコトヲ確カム

三月廿五日 本日本部ヨリ第一等上級（月俸四十円）職員ヲ命スノ辞令書ヲ受領ス竹本、渡辺、伴、三浦、白井、水村、吉田等何レモ昇級セリ

五月十五日 本日午後七時ヨリ茶話会及貯金会ヲ開ク学鑑ニ付議論アリシ

六月十五日 午後六時三十分工作部楼上ニ於テ茶話会ヲ開キ関税改正ノ上ハ販売品ノ元価ニ何程ノ騰貴ヲ来スヤ調査ノコト及社員寢所不定ハ取締上不都合ニ付一定ノ場所ヲ定メ適當ノ寢所ナキ分ハ本部ニ増設ヲ請求スルコト

六月廿日 丸善株式会社唐物店ノ名称ヲ營業致居タル処菱屋号ヲ廃シ同店ヲ已来丸善株式会社洋物店ト改称營業スルコトニセシヨリ新聞へ広告ノ上唐物店ハ已来洋物卸店ト改称シタリ

七月廿四日 本日休業商品調即棚卸ヲナス商品過上千四百余円内三百七十六円ヲ滞貸準備トシ千四十四円ヲ雑

益トシタリ

七月廿九日 本日通三丁目十二番地広瀬周菴持地八十一坪外ニ裏長屋二軒付ヲ一坪七十五円ニテ買収スルコトニ契約ナレリト聞ク

十二月七日 本日発行都新聞商業評判記廿八欄内ニ通三丁目丸善洋物店ハ地方ニモ多少其名ヲ知ラレタル店ナレト近頃ハ不勉強ニテ品物ハ悪シク値段ハ高ク且客ノ撰嫌ヲ為シ兎角老舗ヲ鼻ニカケルヨリ評判悪シク大ニ來客モ減少セリ云々ト掲載セリ

十二月廿六日 本日十五番地地所百二十坪一坪九十円替五ヶ年賦年利八朱ニテ買収スルコトニ約束出来セリ
これらの記事を通覧するに、職員の増給、寢所の改善、唐物店の菱屋の併合等、社は明治十七年の経済的破綻の尾をひく長い間の不況雌伏の状態から、ようやく立ち直ったものの如くである。これは金原明善が大いに力を貸して再建を援助してくれたからで、この日記中、彼に関する記事は左の如くある。

五月十六日 晩來金原明善氏來店同人カ丸善ニ対スル意志ヲ重ナルモノ一同ニ申シ聞ケタリ鈴木同伴ス此席ニ列シタルモノハ松下、小柳津、金沢、山崎、斎藤、竹本、三次、川村、嶋村、嶋崎、渡辺、ノ十一名及予ナリキ
五月廿日 本日社員ト金原氏ニ於ケル誓約書ニ調印ス但実印ヲ用ユ

五月廿一日 金原明善鈴木仁一郎同伴本日北海道ニ出立セリト

七月四日 晩來金原明善氏來店、北海道旅行中見聞セラレタル談話アリシ